

マゾは男としての価値が無いので

握りこんで潰す！  
クンマーパンチで潰す！  
潰れた後は、  
キン○マゴロゴロも！

射精できなげうらで潰す！  
きん○まを潰す！

キン○マを潰して良いことになりました！

マゾは男としての価値が無いので、



【第1章】

キン○マを潰して良いことになりました！

【マゾ狩り法案 要略】

- ◆女性は、全てのマゾのキン○マを潰す権利を保有する。  
(キン○マを潰されたマゾにいかなる被害が及んだとしても、女性側がその損失を補填・負担することは無い)
- ◆女性には、全ての男をマゾかどうか検査する権利が与えられる。
- ◆検査方法は、女性側に決定権があるものとする。
- ◆検査の際、男性はいかなる内容であっても女性の指示に従わなければならない。

マゾ狩り法案が施工された。

それに伴い、男子校の石川高校に、女子校の徳田女子から検査係の女生徒が派遣されることとなった。

検査対象は全ての男子生徒ならびに、男性教員。

検査方法は各自女生徒の判断に委ねる。

徳田女子の生徒達は、検査するだけで一流大学への推薦が受けられるとあって俄然やる気である。

しかもマゾ狩りの結果次第で、よりレベルの高い大学に入学することができる。

検査に積極的どころか、なんとしてもマゾのキン○マをより多く潰したいと考えていた。

しかし、一流大学の中でもトップクラスの大学への推薦にはマゾのキン○マ4人分が必須。

そこで徳田女子の女生徒達は知恵を絞った。

2人ペアとなり、一人は男子のキン○マを握りこむ。

もう一人は男子校では絶対にお目にかかれないパンチラを見せて、無理やり勃起させようと考えたのだ。

キン○マを潰されそうになっているのに、パンチラごとき勃起する男はマゾ。というのが建前である。

もちろん徳田女子の女生徒も鬼ではない。

勃起しなかった男は潰さない。

しかし、もしも検査した男子がマゾであった場合、容赦なく生殖機能をきっちり奪い取る。

大学推薦のためだけではなく、世の中の為に働きたいというしつかりとした正義感に燃える女子がいたことも事実だし、多くの女生徒は、正義感8割・大学推薦という飴目的2割といったところだろう。

対して石川高校の男子生徒には、『考えうる限りの対策』を打つことが事前に固く禁じられ、また検査が行われる当日まで1週間のオナニー禁止も通告されていた。

検査場所は石川高校。

時間は朝の8時40分から夕方17時まで。

期間は7月1日から7月20日まで。

そして検査当日を迎えた。

女人禁制の男子校に、華やかな女子高の香りが広がる。

出迎えた男性教員たちを顎で使いながら、女生徒たちは校長室を荷物置き場兼着替え室とし、当たり前のように校長を追い出した。

「校長センセ ♥

『検査』されなくなったら黙って校庭の端っこで正座しててね ♥

そこでなら校長センセとしてのお仕事してもいいよ ♥

あ、校長室はあたしらの許可が下りるまで入室禁止だから。

勝手に入ったら、即『検査』だよ ♥♥♥

分かった？」

「はい！」

わかりました！」

ようやく18になったばかりの女子に、60近い校長は戦々恐々と股間を両手で隠しながら、校長室を終われるようにして出て行った。

つい昨日までクーラーの効いた校長室だったのに、今日から炎天下の中での雑務だ。しかしそれでも、マゾ狩り検査にかけられるよりはずっとマシである。

校長室をジャックした徳田女子の女生徒達は手始めに、校長室から全校生徒に校内放送を流した。

「びんぼんぼんぼくんっ ♥

石川高校の童貞臭い男子の皆さん ♥

今日から全校生徒ならびに、全男性教員はマゾ狩り検査の対象となりましたあ (笑)

よって今から全クラスをしらみつぶしに、一つ一つ検査に行きまっす ♥

検査中のクラス以外は、普段どおり授業をしててOKですよ ♥

でも私達が行ったら、授業は中止！

そのまま全生徒がマゾ狩り検査ですう ♥

私たち、徳田女子の女子生徒が来たら、必ず『検査官の先生』って呼んでくださいね ♥

♥

呼んでくれないと、マゾ狩り検査をいつもより厳しくつく行きますので！

もちろん連帯責任で、呼ばなかった馬鹿以外にも全員厳しく検査しまっす ♥♥♥

それからあ ♥

本日、何人かの男子生徒がお休みしてるって聞いてまっす。

今日から20日まで、1日でもガッコーをお休みした生徒は、強制的にマゾと認定して

キン〇マ潰しますんで、そこんところよろしく ♥

キン○マ潰されたら、射精できなくなるっ♪  
オナニー出来なくなるっ♪

女の子の中に精液発射できなくなるっ♪♪♪  
それも一生！

ずっつと、ずっつとっ！

死んでもセックスできないっ(笑)。

嫌ならマゾじゃないって所をしっかり見せてくださいねっ♡♡♡  
じゃ！

ぴんぽんぽんぽん♡」

校内放送に石川高校の生徒は一様に前かがみになり、奥歯を噛んだ。

そんな中、学校のバイク置き場の端でタバコを吸う一人の男子生徒が声を荒げた。

「つぎけんな！

女なんか、そんな簡単に潰されてたまっかよ！！！」

男子生徒の名は、山内光(やまうち ライト)と言った。

古典的なキラキラネームである。

・・・が

その名前に反して本人はいわゆる不良、DQNだった。

カツアゲ、喧嘩、暴行。

進学校の石川高校では珍しく、幾度となく補導された札付きである。

こういう札付きの中でも、一匹狼の札付きは『権力』を嫌う傾向がある。

山内もご多分に漏れずそういう類であった。

そしてこういう札付きが、どの程度権力に噛み付けるかで、パワーバランスがはつきりとするのだ。

校内放送のマイクが完全に切られてから、山内は校長室に飛び込んだ。

だがこの時、なぜか山内が怒鳴り始めてからすぐに校内放送用のマイクがONになり、全校に山内が得意なはずの喧嘩で徳田女子の生徒の一人に敗北、捕らえられ、一糸纏わぬ姿にひん剥かれ、一切抵抗できないように縛り上げられたところまでしっかりと放送された。

音声のみの放送が逆に想像力をかきたて、恐怖心を煽る。

これにより石川高校の男子は全員が悟った。

抵抗は無駄。

暴れても無駄。

絶対に勝てない。

素直に検査を受けるしかないのだ・・・と。

そして数分後、最初のクラスに『検査官の先生』がやって来た。

「はーい。

女子に免疫の無い童貞男子の皆さん♡♡

同い年の女子ですよ♡

そしてえ・・・皆さんの何人かのキン○マを握りつぶす『検査官の先生』ですよ」

悪意を隠そうともせずに、金髪の女子 柳田 楓（やなぎだ かえで）はそう言った。

古風な名前とは裏腹に性格は極めて軽く、残忍で、すでにプライベートで何人かのキン○マを握りつぶしている『優等生』でもある。

キン○マ潰し経験者ということもあり、どの程度の握力で握ると潰れるか潰れないかの見極めが出来ることが、彼女の自慢だ。

実際、彼女は握りこみ始めてから潰し終えるまで、いくらでも時間をかけることが出来る。本人の談だが、最長記録は1時間半だそうだ。

~~~~~  
「えっとお・・・♡

映画見ながら、彼氏のキン○マ握ってたらね。

ホラー映画だったんだけど・・・。

急に大きな音がしたから、びっくりして思わず『えい！』って（笑）。

時間？

映画が終わりそうだったし、1時間半ぐらい握ってたかな？」

~~~~~  
「あ・・・あの・・・こ・・・こんにち・・・は・・・。  
えっと・・・あの・・・皆さんの・・・マヅ・・・検査を・・・その・・・」

顔を真っ赤にしながら、隠れるように楓の後ろで挨拶をしたストレートロングヘアの女子、水城 亜美（みずき あみ）。

恥ずかしそうにもじもじと自己紹介をしているが、徳田女子の間では、亜美こそが最も

「むっつりスケベ」な性格だと思われている。

いや、実際そうかもしれない。

誰よりもキン○マ潰しに造詣が深い。

しかしそれらは彼女が得意とする勉強と同様に、机上で学んだことであって、実践経験は全く無い。

ゆえに亜美は顔を真っ赤にして、緊張しているのだ。

本人曰く、

「一度経験すれば大丈夫です」

とのこと。

楓は授業をしていた男性教員に教壇をどけさせると、黒板の前に膝を着いて腰を下ろし、その前に男子生徒を一列に並ばせた。

無論男子生徒は、ズボンはおろかパンツまで亜美に没収され、Yシャツ一枚の状態で並ばされている。

この時楓は、男子の列が乱れていることが気に入らなかったらしく、全員に小学生のように「まえにならえ」をさせて、列を正した。

性格は軽くとも、しっかり締めるところは締める性格らしい。

屈辱に顔を赤くする男子生徒に向かって、

「つていうか、これからキン○マ握りつぶしてもらおう男は、少しでも女性様に媚を売らないとダメっしょ。

ちゃんと並ぶのなんか、当たり前じゃね？」

そう言って、亜美の苦笑を誘った。

亜美は苦笑しながらも、パンツまで下ろした男子生徒一同から立ち込める「童貞臭」に目を回していた。

こんなにも濃い、情けない香りに包まれたことなど無かったので、恥ずかしさを通りすごして、眩暈がしたのだ。

しかしそのおかげで、亜美はもはや視界にいる男子を同じ人間だとは思わなくなっていた。

同じ人間であると思うから、「少しでも上手くやろう」と緊張する。

対等な人間でないなら・・・、相手の意見を尊重する必要も無ければ、緊張して対応する必要も無い。

亜美はスカートを脱いで、ブラウスとパンツ一枚になって楓の横に立った。

そして列の一番前に立つ男子から、自分のパンツルックがよく見えるようにブラウスの端を握り、捲り上げる。

クラスの男子一同から「おおおおお」と歓声上がるが、彼らはまだ気がついていな



い。

これが亜美の罫であることに。

男子校で・・・、そのほとんど全員が童貞で・・・、挙句の果てに先週から1週間オナ禁（もつともオナ禁を守れた男子がどれほどいたかは、疑問符が残るが・・・）。

つい先ほどまで顔を真っ赤にしていた女子のパンツをこれほどはつきりくつきり見てしまつて、勃起しない男子などいるはずも無い。

そこに楓の、細くて白い、されど長くてしっかりとキン○マを握りこめる指が伸びた。

楓は、キン○マを握りこんだ瞬間、・・・笑っていた。



ふわっと包み込むように添えただけの白い指。

キン○マに逃げ場を与えぬ絶妙な角度。

安心感さえ覚えさせる慣れた手つき。

そして無邪気なまでの残忍な瞳と、瞳の中の闇とイタズラっぽい笑顔。

楓はキン○マ部分を指の上に乗せて、指から電気あんまのような振動を与えた。

男子の体に変化はない。

腰から崩れ落ちないよう、足に力を入れているのが分かるくらいだ。

今度は優しく指を前後させて、揉む！揉む！揉む！！

「ひいっ！」

最初の男子はついに自分のキン○マが潰されるのかと怯えて飛び上がったが、それ以外に肉体の変化は無い。

楓は視線をキン○マから外さずに、舌をぺろっと出して亜美に合図を送った。

合図を受けた亜美は、ふうくつと大きくため息をついてから、呆れたように最初の男子の目を見てこう言った。

「まさか最初の一人がいきなり、マゾだとは・・・思いませんでした。分かります？」

なんで今、楓さんがあなたのキン○マ揉み扱いたか。

『貴方のキン○マ、握りこまれてますよ。』

このまま勃起したままだと、マゾとしてキン○マ処分されますよ。

一生童貞、一生中出し経験無しでいいんですか？

マゾじゃないなら、勃起しないでくださ〜い』って・・・。

そういう意味ですよ？

でも貴方は勃起したまま。

これからキン○マ握りつぶされるって言うのに、勃起しているマゾは・・・。

射精機能を失っても仕方ありませんね？

同意しなくていいですよ？

返事も結構。

ただ、そのまま足を開いたままですべてください」

最初の男子は涙声で『タ○乞い』をしたが、楓は許さなかった。

「ん。」

後もつつかえてるし、ドンドン行くしかないよね〜(笑)。

じゃ、そういうことで男らしくあきらめてチョ♡」

楓の爪の先がキン○マに食い込む。

指が食い込んだ爪をとっかかりに一気にキン○マを握りこみ、逃げ場をなくしたキン○マがジユクジユクと音を立てて圧迫されてゆく。

最初の男子のキン○マは2つとも一気に潰され、生涯に渡りセックス・オナニーの道を永久に閉ざされてしまった。

そして、劈(つんざ)くような断末魔とともに、最初の男子は潰れた2つのキン○マを両手でおさえたまま倒れこみ、その場で気絶した。

すぐに気絶した男子は他の男子に抱えられ、教室の脇に気絶したまま捨て置かれた。

「ん。」

じゃ、次♡♡」

「次の男子、前に！」

あら？」

「ん？」

ふっ♡マジかよ(笑)」

2人目の男子は最初の男子と違い、やや小柄であった。

その体格に呼応するように、彼のキン○マは……。

「包茎ジャン！」

勃起してんのに、全然亀頭が見えないし！

これ、ガチの真性包茎！？」

初めて見たっ！」

「何度も参考書で読みました。

こういう包茎男子は特例がありますよ」

「特例え？」

「どんな？」

『真性包茎は生殖機能無し。』

つまり、男としては無価値。

マゾ同様に、問答無用でキン○マを潰せ！』ですよ」

二人目の男子の顔色が真っ暗になる中、同い年の女子は二人とも優しく微笑んでいた。



【第2章】

マゾは男としての価値が無いので、  
キン○マを潰して良いことになりました！

一方他のクラスには、別の二人組の『検査官の先生』が向かっていた。この二人は楓や亜美とは少し違う。

楓や亜美は、ああいう態度でもそれなりにサーブス精神があるのだ。だから男子の前でスカートを脱いでくれるし、きちんと握りこんで、きっちり潰してくる。

後腐れの無いようにきっちりと……。

しかし今度の二人組はそうではない。

「つていうかなんでパンチラ？」

見たいなら、スカートの下に男が行くべきだよな？」

「そうそう♪」

あと握りつぶすのキモい！

ガンガン叩いてたら、潰れるんじゃない？」

「じゃ、ウチラの検査は、

『男が地べたに這ってパンチラ挿んだ瞬間、キン○マにハンマーパンチ♥』だね。

ハンマーパンチしても勃起止めなかったら、そのまま潰れるまでパンチってことで(笑)」

「賛成しえ♪」

アタシ、ハンマーパンチ係で良い？」

「む、分かった。」

その代わり今度、喫茶フルティンのミルフィーユおごってね」

「オツケ♪」

洪々パンチラ担当となった木村 真里(きむら まり)。

『デレないツンデレ』と仲間内では言われているが、常に不機嫌というわけではない。

彼女の実兄である正利(まさとし)のキン○マを蹴り上げる時だけは、上機嫌でよく笑う。

他の時はあまり機嫌は良くないようだが……。

真里のトレードマークであるパツツン前髪も、兄の好みに合わせてのものだ。

そして、彼女のお小遣いはそのほとんどが甘いものに消える超甘党。

ハンマーパンチ担当となった吉永 エリカ(よしなが えりか)。

ややウェーブがかかったロングヘアが肩まで伸びている。

こちらは空手の有段者である。

真里がハンマーパンチの担当をあつさりとしエリカに譲ったのもそのためだ。

もつとも……、道場で、倒れこんだ男子の股間に下段蹴りや下段突きを執拗なまでに

行ったことで、師範代（もちろん女性）から下段攻撃禁止を言い渡されている。

そのことが余計に彼女のストレスを肥大化させているのだが、いつも快活に笑い、樂しげに話すので、エリカの本当の心理状態を知る者はほとんどいない。

「そーいうわけだから、このクラスの男子は全裸で私の股の下に仰向けになりなさい。拝むようにね！」

「クスクス。」

仰向けになったら足を大きく開いてね〜♪

アタシがアンタらのキン〇マにハンマーパンチしてあげるから♥♥♥♥

クラス中の男子は一瞬抵抗の意思を見せようとしたが、すぐに言われたとおりに全裸になった。

もしもここで抵抗して、腕力で目の前の女子を何とか出来たとしても次に待っているのは、国だ。

国家権力が相手では勝ち目が無い。

法律とはそういうものだ。

というか、エリカがいる時点でそもそも腕力で勝てるはず無いのだが・・・。

「あれ〜？

ずいぶん聞き分けがいいんだね〜？

もしかして根性無し？」

自らを弱者と知る男子たちは、真里の挑発に苦笑を浮かべて、媚びた目をエリカに向けてただであった。

「ま、男なんてそんなもんでしょ。

はい！

じゃあ最初はお前な！

パンツもさっさと脱げよ！

そっちはチ〇ポ見られるの慣れて無くても、こっちは見慣れてんの！

さっさと脱げよ、童貞！」

「・・・ぐ！」

「ん〜♪

今なんか反抗的な顔しなかった〜？

ま、チ〇ポ勃起させながら怒った所でぜんぜんせえ〜ん怖くないけどね〜（笑）」